

## 【研究ノート】

## 無辜の死

高山 真<sup>†</sup>

## 1. フクシマから、ナガサキを想起する

東日本大震災の発生から10年が経過しようとする2020年10月に福島県の双葉町を訪れた。この町にオープンしたばかりの「東日本大震災・原子力災害伝承館」を見学するためである。双葉町は、福島県浜通り地方のほぼ中央に位置する。東京電力福島第一原子力発電所のある場所である。

東京から常磐線で北上する列車が双葉駅に近くころ、車窓の風景を眺めていると、長崎で出会ったMさんという被爆者の語りがあざやかによみがえってきた。震災が発生したときに報道された福島の映像をみたとき、長崎の原爆投下後の風景を思い出したという語りである。

私は、長崎で「語り部」として生きる被爆者とのライフストーリー・インタビューに取り組んできた。2005年に着手してから2013年に学位論文としてまとめるまで継続した長期的な調査では数多くの被爆者と長崎に暮らす人々との重要な出会いを体験することができた。そのなかでも、とりわけ印象に残るのは、Mさんという被爆者との出会いである。彼は、長崎市に生まれて15歳のときに、爆心地から南へ4.8キロ離れた小菅町という場所で被爆を体験している。

小菅町で被爆を体験したあとに京都の大学へ進学し、大学では英文学を専攻するかたわら歴史学の教授が主催する研究会に参加し「戦後民主主義歴史学」に出会ったと語っている。この学問との出会いにより変化した歴史認識が、長崎で自らが

体験した出来事の意味を客観的に観察する視点を養ったのではないかと、彼は歴史学との出会いの意味を解釈している。

その際には、たとえば、このようなエピソードが語られている。占領下のプレスコードもあり、原爆や被爆者に関する人々の認識が現在のように広まっていなかった時代に、彼は「日本ではじめての原爆展」を大学の学園祭で企画し、当時の長崎市長から借り受けた被爆の痕跡を示すモノの展示をおこなった。

大学を卒業後は、新聞記者や映画製作などの仕事を目指したこともあったが、故郷の長崎へもどり高校の英語教員になる。最初に赴任した長崎工業高校では、生徒への宿題として両親の被爆体験の聞き書きを課題にしたこともあったという。また、社会的な偏見や差別にさらされる長崎の被爆者が寄り添う場所であった「原爆青年乙女の会」に、お世話係として参加していたのも、この当時のことである。

Mさんは、被爆者として戦後を生きるなかで何を考え、自らの生をどのように意味づけたのだろうか。彼とのライフストーリー・インタビューを实践するなかで、わたしはいつも考えつづけていた。最終的な答えをみいだすことはできないかもしれない。しかし、残された質的資料と、インタビューの経験（思い出）をてがかりにして、すでに他界してしまい、死者になったMさんとのコミュニケーションをつづけることは可能である。

浜日出夫が指摘するように、社会学は生きている者により構成された社会についての考察を想定しているが、死者を含めた共同体として社会につ

<sup>†</sup> 立教大学社会学部兼任講師

いて考えることも大切な作業になるだろう（浜2002）。たとえば、冒頭に述べたように、ある人物が双葉町を訪れるときに、長崎で被爆を体験し「被爆者」として生きた生存者の生と死に思いをはせる行為について考えることは、現代社会において長崎原爆被災の記憶を想起する意味を考える有効な手がかりになるだろう。現代社会に生きている私が、ある場所を訪れることにより、他の場所で生じた歴史的出来事を想起する現象を観察するという意味で、調査者の自己において生じる記憶に関わる現象をメタに記述する試みである。

## 2. ふたつの経験

長崎でのMさんとのインタビューを振り返ると、いくつかの残された課題がみえてくる。そのひとつは、インタビューをおえるころに生じた東日本大震災にともなう福島県を中心とする放射能被害と長崎における原爆被害にともなう放射能被害という、ふたつの経験をめぐる語りをいかに捉えるかという問題である。Mさんというひとりの被爆者の語りに現れるふたつの経験の語りは、相互に無関係なふたつの経験であるのか。それとも、差異を含みながらも交わりのあるふたつの経験なのだろうか。

インタビュー協力者であるMさんは、その主観的世界においてこれらのふたつの経験を同一の地平でとらえようとしているように調査する〈わたし〉にはみえた。Mさんは、長年の被爆者運動と証言の聞き書き運動をつづけるなかで、他者の痛みを内面化し、被爆者として深まり、被爆体験の広まりを体験してきたと語っている。こうした経験は、「被爆者になる」という語りにより思想化される傾向がある（高山2016）。

彼は、東日本大震災が生じた直後に報道された映像をみて、長崎の被災時の風景を思い出したと語っている。そして、被災した福島の高校生とのメールによる交流をとおして、「放射能被害におびえる福島の人たちに寄り添いたいと考えるよう

になりました」とインタビューにおいて語り、長崎において被爆者問題に関心の高い市民によびかけ「福島と長崎をむすぶ会」を設立している。

これまでに取り組んできた長崎における被爆者調査の分析と解釈において、このような調査協力者の語りについては考察の対象とすることを控えてきた。調査における基本的な問いは、ある極限的な出来事を体験したものは、その体験を言語によりいかに表象へもたることができるかというものであった。そして、この問いにたいする答えをみいだすために、私は長崎の被爆者とのインタビューをつづけ、ひとりの生存者が自己の体験をどのように語るかという点に考察の視点を定めてきた。

こうした基本的な問いの背景には、アウシュビッツをめぐる表象の限界という議論が念頭にあった。1990年代に活発に議論された戦争の記憶と表象不可能の問題を、実際に戦争を体験したサバイバーとの対話にもとづいて身体性をともない考える。こうしたテーマの探求の方法として対話的構築主義インタビューは興味深い質的調査の方法に思われた。

対話的構築主義インタビューにより構築された「被爆者になる」という語りの分析は、さしあたり長崎原爆被災における多様な立場で体験された被爆者の経験を、ひとりのサバイバーの視点から見通すという意味で「語りえないもの」を記述する社会的な方法を提示することができたと考えている。ここでは、実際に被爆を体験したMさんという身体性をともなう語り手の存在がおおきな役割を果たしている。

長崎で爆心地から半径1キロ圏内で生き延びた人たちの体験、外国人被爆者、在外被爆者の体験のように、長崎で被爆を体験したMさんにとっても知り得ない体験を聞くことにより、彼は、自らの被爆体験を広めることができたと語っている。インタビューによりMさんの語りを聞くことをとおして、聞き手は自らの日常生活における死と死別に関する感情経験を重ね合わせて語り手の主

観的世界を追体験する。

こうした追体験のプロセスは、Mさんが「わたしより大変な思いをして生き残った被爆者」として認識する被爆者と、インタビューの語り手であるMさんと、聞き手である〈わたし〉の関係から構成されている。例えば、Mさんが「大変な思いをして生き残った」と考える被爆者の一人は、1960年代に石田忠が生活史調査の対象とした福田須磨子である。

福田須磨子とMさんと〈わたし〉を同一の地平で論じることができないが、すくなくとも長崎という場所において生じた出来事を想起しようとする主体という共通点を有している。Mさんが、被爆を体験していなくても「被爆者になる」ことはできると語るときに前提とされているのは、長崎における過去を想起する意志を有する主体という意味であるように思われる。

そのため、福島における原発事故にともなう放射能被害としての「被ばく」の経験を、Mさんとの対話から構築された「被爆者になる」という語りは視野に収めることができるのかという点について慎重に判断する必要があると感じた。なぜなら、インタビューで語られる「被爆者になる」という語りの「被爆者」は、原爆被害による被爆を意味していたからである。もちろん、「被爆者」という用語が原爆被害による被爆を意味することは、かならずしも自明ではなく、たとえば原子力発電所事故や劣化ウラン弾による放射能被害など多様な「被ばく」の経験が存在することは知識としては知っていた。

しかし、実際に対話をつづけてきた原爆被災を体験した被爆者が、「福島の人たちに寄り添いたい」と語るときに、この語りを聞いた私は、それまでの調査をとおして追体験してきた「被爆」の経験を見つめなおし、考えなおす必要があるように感じたのである。この出来事が生じてから一定の時間が経過し、記憶をアーカイブする施設を見学するために双葉を訪れたとき、Mさんの残した「福島の人々に寄り添いたい」という言葉が想

起されたのである。

### 3. 体験講話を聞く

双葉町にある東日本大震災・原子力災害伝承館（伝承館）を訪れて、語り部の体験講話を聞いた。このとき、長崎のフィールドワークの初期には、長崎原爆資料館の学習室で多くの被爆者による体験講話を聞いたことを思いだした。長崎では、市の外郭団体である長崎平和推進協会によって被爆者の体験講話が実施されている。その多くは、長崎を訪れる修学旅行生を対象としているため、一般の見学者として原爆資料館を訪れても、語り部の体験講話を聞くことはできない。

そのため、調査のたびに、市の職員として平和推進協会に Outreach している職員に「社会調査の一環として被爆者の体験を聞きたいため、修学旅行生対象の体験講話を見学させてほしい」と依頼し、許可を得る必要があり、語り部を担当する被爆者と、修学旅行生を引率する学校教員にも挨拶をする場合が多かった。一方で、今回訪れた伝承館の場合は、一般の来館者が展示を見学すると体験講話も聞くことができるようになっている。

長崎で聞いてきた体験講話との違いを含めて、気づいた点を記しておきたい。ひとつは、語り部が体験を話すまえに、伝承館のスタッフが趣旨説明を含めて注意事項を見学者に伝える点である。見学者である聞き手にたいして、録音や撮影を禁止している点などの注意事項が伝えられた。修学旅行生ではなく、一般の見学者を対象にしているためか、長崎の体験講話に比べると、管理のされ方に違いがあるように思われる。

ひとりの見学者として体験講話を聞いたときに戸惑いを感じたのは、スタッフから「語り部の方が体験講話を終えたあとに質問を受け付けるので、質問してください」と促されたことである。展示空間の内部に設置された体験講話を聞くための部屋にいる見学者は、私を含めて3名であった。

東日本大震災と原子力発電所事故に関する語り

を聞くのは、はじめての体験であるため、質問をするようにという促しには戸惑いをおぼえた。体験講話は20分から30分の時間をかけて語られた。部屋にはスクリーンが設置されており、語りの内容に関連する写真を中心とするスライドが投影されている。

長崎の体験講話は60分程度であった。長崎の調査に着手した当初は、1日に2名から3名の被爆者による体験講話を聞いた。被爆者は高齢であるが、多くの聞き手を前に体験を語りつづける意志をもつ人々には特有の力がある。どの被爆者の語りを聞いても、この人にしか語るこののできない体験が語られているのであり、理解することは容易ではないと感じる。それだけではなく、語り手にとっても、自らの体験を言葉にすることは困難であり、その困難さとの格闘のなかで語りを展開している。

体験講話を聞くことの難しさは、語りを聞いたときに、どのような言葉を、どのように返すかという点にある。調査者として、多くの体験講話を聞いていくと、このようなことを考えることが多かった。体験講話を聞いている修学旅行生から被爆者に向けられる感想の多くは、核廃絶と平和を願う定型的な言葉である。そのことにたいし、ときに虚無感が生じる。被爆体験の語りをめぐる現実には語り手が直面する表象不可能性と、語り手と聞き手のコミュニケーションにともなう伝達の不可能性に特徴づけられる。修学旅行生が被爆者の語りにたいして定型的な感想を語ることしかできない現実もまた社会を映し出す一側面である。被爆者が語り得ない体験をいかに物語るかを聞き取ろうとするときに、こうした困難な現実をどのように分析すればいいのだろうか。双葉の伝承館で体験講話を聞くときには、長崎で被爆体験の語りを聞きはじめたころに直面したフィールドワークのリアリティもよみがえってくる。

こうした長崎における初期の調査経験を思い出すと、双葉町に設立された伝承館の体験講話のように見学者が体験を聞き、その場で、語り手に質

問することができる仕組みは新鮮なものに感じられる。ここには、どのような違いがあるのだろうか。ひとつには、東日本大震災と原子力災害の語りを聞いたときに、聞き手が語り手に伝える感想として、被爆体験の場合のように核廃絶と平和を願うような定形化された語りかたが成立していないことが推測される。モデルになるような語りが存在していないのではないだろうか。東日本大震災と原子力災害という出来事を体験する人々において、その苦悩の本質は何かという点を見定める必要があるように感じた。

#### 4. 苦悩の本質

かつて石田忠が指摘したように、被爆体験における苦悩の本質は「原爆症」にあり、原子爆弾による被爆にともなう精神的閉塞という苦悩が重要な問題になる(石田 1986: 32)。石田は、被爆者がこれらの苦悩をどのように体験し、どのように克服するかを福田須磨子の生活史調査によって探究した。石田と福田の対話にもとづく調査は、よく知られるように「漂流」から「抵抗」への「飛躍」という「反原爆」の思想を形成した。私は、石田の調査から40年を経て、福田須磨子とも親交のあるMさんとの相互行為としてのインタビューをとおして「被爆者になる」という語りを構築した。

石田の調査の重要性はいうまでもないが、「反原爆」の思想では捉えることができていない論点もあるため、Mさんとのインタビューの経験をふまえて原爆被害の苦悩の本質を再度検討する必要があるだろう。原爆被爆者の苦悩は、被爆を体験した者が自らの体験を言語化することに伴う困難さにある。つまり、体験を物語ることの困難である。自らの体験の言語化しようとする語り部は、その言語化のプロセスで聞き手との相互行為により自らの体験の社会的意味に気づき、語りつづける意志を形成する。被爆体験を次世代へ継承するという社会的役割を認識することにより、さまざま

まな立場で被爆を体験した人々の語りを聞いて、自らの被爆体験を広め、被爆者として深まっていく。こうしたMさんの語りが意味するのは、福田のように自らが直面した原爆症の苦悩と精神的閉塞に直接的に対峙するのではなく、「わたし」より大変な状況を生き延びた他者の語りを聞くことをとおして、自己物語に現れる語りえないものを物語ることにより被爆者としての生き方を形成する思想である。Mさんとのインタビューをとおして被爆者の生き方に大きく影響すると実感したことの一つは、言語行為、とりわけ物語行為が担う役割の重要性である。ここでは、原爆被害の苦悩の本質の特徴を指摘するにとどめ、「反原爆」の思想と「被爆者になる」という語りの関係については稿をあらためて詳細に検討する必要があることを確認しておきたい。

「被爆者になる」と自己を物語るMさんが、その人生を終える間際に寄り添いたいと願った福島の人々の苦悩の本質は何だろうか。もちろん、すぐに答えをだすことのできる問いではないが、この問いにアプローチすることは「反原爆」の思想と「被爆者になる」という語りの関係を長崎という場所性を超えて立体的に捉えることを可能にするだろう。研究ノートを閉じるにあたり、福島の人々の苦悩の本質へのアプローチとして、伝承館において、ある語り部の体験を聞いたときに調査者の自己に生じた感情経験を記しておきたい。

体験講話を聞く際には録音と撮影を禁止されたため、メモを取ることも控え、語りに耳を傾けることに意識を集中した。この方の語りは、長崎で聞いてきた多くの体験講話と比較すると、とても明瞭なストーリーであるように感じた。たとえば、被爆体験の語りにはしばしば現れるような、どれだけの言葉を尽しても到底表現することのできない壮絶な体験、凄惨さといったエピソードは、すくなくとも、この日に聞いた語りには現れていない。

震災前の生活の様子、家族構成、震災前の生活において原子力発電所の近くに暮らしていることの危険性を考えることはあったというエピソード、

震災の当日に体験したこと、避難に関する話し、避難生活を送る中での苦勞、一時的に帰宅した際に目にした風景、その後の家族関係の変化、かつて暮らしていた地域に戻り桜並木を目にしたときに生じた感情などが写真の紹介を交えて語られた。

この方の体験講話を聞くなかで印象に残ったのは、「自分の人生ではない、借りもの人生を生きているような気がします」という語りである。私は、こうした語りを聞きながら、体験講話が始まるたびに、伝承館のスタッフから質問をするように促されたことを思い出し、いったいどのような質問をすればよいのだろうかと考えていた。避難生活をとおして、いろいろな方に助けてもらったというエピソードを強調されているように感じたことも印象に残っている。

体験講話がおわり、スタッフの方が「それでは質問を受け付けます」と伝えた。他の見学者が質問をする様子はなかったので、質問をした。そのときに感じたことを、なるべく、そのまま伝えたいと思った。質問は、次のような内容である。

今日は、本当にありがとうございました。私は、今日、はじめて福島に来ました。震災と原子力災害については報道に触れる以外には、何も知りませんでした。今日、双葉駅から、この伝承館までの道を歩いてくるときに、そこに広がる風景を見て、言葉を失いました。本当に大変なことだったのだと思いました。今日のお話を聞いても、私には、何も言えないと思いました。ですが、質問ということで、ひとつ聞かせてください。どうして、ご自身の体験を、こうした場所で語ろうと思われたのでしょうか。そのきっかけになるようなことがあれば、教えてください。

私は、とても緊張しながら、このように質問した。伝承館のスタッフの方は、質問の前半についてはうなずきながら聞かれていたが、最後の質問については、少し考えた後に、語り部の方のほう

をむいて「答えてください」と伝えた。その方が、わたしの質問に答えてくださった内容のエッセンスは、おおよそ、つぎのとおりである。

避難生活をするようになってから、本当に大変なこともありましたが、その時々には、いろいろな方にお世話になり、助けてもらったという気持ちがあります。だから、その人たちに助けてもらったということを忘れたくなくて。今日まで生きてくることができたということを忘れてしまいそうで、それを忘れたくないという気持ちから、体験講話をしようと思いました。十分なお答えになっているかわかりませんが、こういうことでよろしいでしょうか。

質問にたいする丁寧な返答を聞きながら、私は、自分自身が質問した内容にたいして、果たして、こうしたことを聞いてもよかったのだろうかという反省の念と思われる感情が生じていることに気づいた。この質問をした理由は、伝承館のスタッフから質問を促された際に、長崎での語り部の体験講話を聞きはじめてから長期的なインタビュー調査に取り組むようになった時期を含めて、「どうして、体験を語るのですか」とMさんをはじめとする協力者の方々に一貫して聞きつづけてき

たことを思い出したからである。

その場では、それ以上のことを伝えることは控え、このように返答してくれた語り部の方にお礼を伝え、伝承館の展示の見学を終えた。伝承館の周辺を歩き、そこには、なにもない風景に身を委ねようとしたときに、この場所を訪れて、被爆者の語りを聞いてきた意味を、ようやく理解することができたように感じた。

極限的な出来事を体験した者は、その語り得なさをいかに物語ることができるか。これは、長崎のフィールドワークにおける基本的な問いであった。この問いは、東日本大震災と原子力発電所事故による体験を考える際にも有効なのだろうか。福島の人々に寄り添いたいという長崎被爆者の語りを聞いた私は、長崎でのインタビューの経験を振り返りつつ、あらたなフィールドワークを構想し、つぎなる問いを形成していきたい。

#### 参考文献

- 浜日出夫, 2002, 「他者の場所 ヘテロトピアとしての博物館」『三田社会学』No.7, p.5-16.
- 石田忠, 1986, 『原爆体験の思想化 反原爆論集 I』未来社.
- 高山真, 2016, 『〈被爆者〉になる 変容する〈わたし〉のライフストーリー・インタビュー』せりか書房.